
クロス・ロード

kazuha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロス・ロード

【Nコード】

N6249C

【作者名】

kazuha

【あらすじ】

部活帰り、俺たちはいつものように家に戻る。そして友人と別れ、いつもの交差点を渡ろうとする。だが、渡れない。そこにはいつもとは違う、違和感があった…

「じゃあな」

それが俺たちの別れの言葉。いつもの帰り道、いつものように帰るだけ。

今日の部活は疲れたな。

俺はチャリをこいで、並木道を通っていた。風はそよぎ、互いに話し掛け合っているようであった。

住宅街に入り、そしていつも通る交差点に出る。別にこの交差点を通らねば帰れないというわけではないが、もう一つの道は橋を渡って交差点の上を行くのだが、坂が急で昇るだけで疲れる道なので、部活疲れの帰りには体にこたえる。だからいつも下の道を通っている。

交差点の信号を待っている。ここの信号は一度赤になると、なかなか青には変わってくれない。しかし今日は何と早いものか。ものの十秒で変わった。

今日は何だかついているみたいだと、俺は気持ちよくペダルをこいだ。

そして横断歩道を渡ると、おばさんが困った様子でいた。片手に偽革らしいバッグと紙の袋を持っている。

「あの、すみません。この辺に、榊さんの家があるはずなんです」

……

それは道案内であった。榊というのは、今さっき分かれた友人の苗字であった。知っているが、面倒くさい。交番だつて信号の対岸にある。そこに聞けばいいと思った。その上早く帰れる優越感で、もうすでに帰った気である。しかしその優越感が逆に俺の心を寛大させてくれるのであった。少しの時間はいいだろうと思った。教えるぐらいなら。

「ああ、榊さんの家なら、この交差点を渡って、そのまままっすぐ

行つて、三本目の道を左に曲がります。それから…」

おばさんはさらに困惑したようだ。話が進むにつれて、顔が険しくなつていったのだ。

「すみませんが…連れて行つてくだらない？」

突然のことに困つた。早く帰りたかつたが、この状況では抜け出せない。こうなることが事前から分かつていれば、分かりませんと言つて家に帰れば良かったと思う。道も分かる、時間もあるとなれば、今更時間がないので、知りませんなんて言えない。第一、俺のモラルに関わる。

俺には唯一つの選択肢しか残つていなかった。

「…あ、はい。いいですよ」

なるべく明るく言おうとしたが、上手く言えたかが不安だ。声はややかすれていたが、自分の耳にはしかと聞こえていた。

「ありがとうございます」

おばさんは微笑んで、俺は自転車を降りて、二人はまた赤信号に変わった信号を待っていた。

数分が過ぎた。待つている間、車の台数を数えていた。信号が変わると、俺たちは交差点を渡つて、俺の言つたとおり、また、今日帰り道として通つてきた道を逆走している。そして数分で榊の家の前に来た。その間、二人は話すことはなかった。唯一話したことはこれだけだ。相手から話しかけてきたのである。

「榊さんとは、お知り合いなんですか」

「そうですね…」

「友達ですか」

「はい」

これだけのことだった。

「ここです」

「ありがとうございます。何とお礼を言えばよいやら」

「いいですよ、別に。では」

なるべく快活に言おうと思つていたが、やはりそうすることはで

きなかった。二回目の榊の家の前は特に変わっておらず、変わっているものとなれば、榊と代わっておばさんが家の前に立っていることだけだった。

自転車に乗り、その場をさわやかに立ち去ろうとした。

俺は気持ちを良くした反面、あー、時間の無駄をしたと心の奥の核の右側辺りで嘆いていた。そう思いながら、またあの交差点に舞い戻ろうとした。

しかしある道に目がついた。左へ行く道だ。そっちへ行けば、少々疲れるが、橋へ上がれる。

もしかしたら、またさつきみたいなことがあるかもしれない。

俺はそんなことはもう嫌だと思いながら、左に曲がった。

開放感に包まれながら、橋を上って行った。これを越えれば家だと、早くも想像してしまった。

そして俺は橋の頂上に来た。さつきまでいた交差点を見た。青だった。普通に渡れたのだったが、もうこれで終わりかと思うと、そんなことはどうでも良くなってしまった。

そこから後は下りだけだと、肩の荷が下りる思いでいたが、下方部を見ると、なにやら工事をしているようであった。

俺は啞然として、また登頂に引き返した。まだ信号は青かった。それが妬ましかった。

橋の下り坂を下り、もと来た道に戻って、また交差点に戻った。残念ながら、信号は赤に変わっていた。

今度はさつきと変わって、そこで数分待った。その時間が長く感じられる。今度は車のナンバーを足してみた。突然車どおりが多くなり、数えるのをやめた。すると歩行者信号が点滅していることに気付いた。

俺はペダルをしっかりと足の裏に当て、すぐにでもこげる体勢を作った。そして信号が青に変わるのと同時に、再びこぎ出した。

信号を待っている時から気付いていたのだが、渡り終えたところに、幼稚園にまだ通って間もないような子が泣いていた。そういえ

ばこの辺りに小さな公園がある。きっとそこから抜け出して、ここに来たのだろう。しかしそれにしても、こんなところでは危ない。万が一交差点に出てしまったら、大きな事故は避けられない。

俺はそれを見て見ぬ振りすることもできなく、その小さな子に尋ねた。

「ねえ君。迷子？」

小さい子は一度泣くのを止めて、俺の顔を見た。そして安心してしまったのか、また泣き始めた。

「どこから来たの？ママはどこ？」

小さい子はうつむきながら、しゃくり声で言った。

「いなくなったの……」

俺は当てが外れたことに残念に思った。

公園であるなら、このまま家の帰路の途中にあるのでいいのだが、分からないとなると、再びこの交差点を渡らねばならない。交番はここからこの交差点の対角線上にあるのだ。

俺は残念に思いながら、一息ついて、その子に目を合わせるように腰を低くして離しかけた。

「じゃあ、交番に行こうか」

「…うん」

その小さな子は小さくうなずき、俺の服をつかんだ。そのほうが好都合だった。空いた手で自転車を押すためだ。

「しっかりつかんでついて来てね。ここ渡っちゃったほうが早いから」

そう言っ、まず、なかなか変わらない赤信号の横断歩道を渡るのではなく、青になっているほうの道を渡った。

渡り終わると、再びその子に話しかけた。

「君はどこに住んでいるの？」

「あっち」

そう言っ、指を指した。その方向は明らかに交差点の向こう側ではないが、交番に行くにはしょうがないだろうと思った。

「君、えらいね。もう泣かないなんて。強いね」

「…うん」

少し元気付いたようだ。そしていくらか会話をすると、信号が青に変わっていることに気付いた。

そして渡って、交番に入った。

「…すみません。この子、迷子なんです」

特に若くもなく、老けてもいなく、それ相応の中年の男性が座っていた。何か記していたようだが、きつと今日の出来事でもまとめていたのだろう。今日も平和だったと。

一旦手を止め、一枚の紙を机から取り出した。

「…どこで迷子になったんですか」

警官は偉そうな口調で、かつ何で来るんだよと顔に書いてあった。そんな言い方で、こちらは客ではないが、不快感を持った。

「すぐその交差点です。ちょうどこの交差点の対角線の場所です」
「そうですか…ありがとうございます」

ぶっきらぼうに話す警官に対して、日本の未来が不安になった。それよりも、ここに預けるこの子のことが不安になった。実際に、少しおびえた表情を作っていた。

「ここにいれば、すぐにママが来るから」

しかしその子はうつむいたまま首を振った。

その不安を取り除こうと、俺はその子の頭をそつとなでた。

「君は強いんだから、大丈夫だよ。ちよつとの我慢だからね」

今度はうなずいてくれた。それは結構深かった。強い意思が感じられた。こんなに小さいのにえらいなと思った。

「えらい、えらい。それでこそ男の子だね」

俺はさらに頭をなでた。

男の子が泣かなくなつて、俺を見上げていた。俺が手を振ると、振り返してくれた。

「じゃあね」

そう言い残して、交番を後にした。

俺は外にとめている自転車にまたがり、窓越しにまた交番の中を見た。警官に手を握られ、その場で不安そうな顔をしながら、顔だけがこつちを向いていた。

俺はペダルに足をかけたが、踏み出すことができなかった。心が男の子の心を見透かして、踏み出すのをとがめている。

男の子は警官の手に引つ張られて、奥に連れられて行った。

俺の足は自然にペダルをこいだ。心がきつく絞められて、心苦しかった。

そしてまたこの交差点に来た。

まだあの男の子が心に残っており、息苦しい思いでその場で信号が変わるのを待っていた。その気持ちをいち早く振り払いたくて、また車の数を数えだした。誰でも思いつきそうだが、さっきの数え方に を加えた。逆から来る車の数を引くのだ。はつきり言ってるだろつかと、母を訪ねて三千里のようなシチュエーションを勝手に描いてしまった。

歩行者用の信号が点滅し、車を数えるのを止め、横断歩道の先を見た。すると、何やら重いものを担ぐ老人がいた。それは人を求めているように見えた。脳裏によく見かけるマンガのコマがよみがえった。

信号は青に変わり、俺は向こう側に急いで渡って、その老人に話しかけた。

「あのー…重そうですね。代わりに持ちましょうか？」

そのご老人はゆっくりと自転車から降りた俺の顔を見た。

俺は一瞬ドキツとした。今思うと、ご老人に言ったことを後悔した。もしかしたら傷つけたかもしれない。見た目より、実は若いかもしれない。まだ自分のことを若く思っているかもしれない。

そんな自分を責めながら、老人の回答を待っていた。今頃取り消しなんて出来ない。待つことしか出来なかった。

老人の口がついに開いた。俺はつばを飲み込んだ。

「じゃあ、お願いします」

その言葉にホッと腕をなでおろす思いでいた。

「じゃ、それ、持ちます」

「はい、ありがとね」

荷物を受け取り、俺はそれを片手で受け取った。

「あら。力持ちなのですね」

照れ隠しをしながら、俺は唇を噛んで、小さくうなずいた。

そして、信号を待つ間、老人は話しかけてきた。

「高校生ですか？」

「はい、そうです」

これも暇つぶしが目的の、どうしようもない話なのだろうが、これは氣遣いに感じられた。俺が氣を使つて荷物を運ぼうなんて言つたから、相手も氣を使っているのだろう。しかしこの氣の使い方は、俺が今までしてきたものとは違った。気軽に話せるのだ。初対面の相手なのだが、なおかつ俺の五倍近くの歳が離れていそうなのだが、不思議な感覚だ。まるで祖母と話しているようだ。

「何をやっていらっしゃるのですか」

「バトミントンです」

俺は答えるだけなのだが、老人はまるで孫と話をするように会話を楽しもうとする。なんて楽しいのだろうか。

信号は青に変わり、老人との話は歩き出しても止まらない。歩幅は老人に合わそうと努力している。曲がってくる車は止まっていた。話に夢中だった。いつの間にか渡り終えていた。

「どこまでですか」

「いえ、ここで大丈夫です。ありがとうね」

その言葉は、なぜか俺の心をむずむずさせた。

「いや、行き先まで送りますよ」

何言つてんだか。ここからどれくらい先のことだか分からないのに、何でこんなことを言つたのか。しかし確証はあった。そんなに遠くはないと。それは老人だからだ。こんな重い荷物を持って、ど

ここに行くのだろうか。

「いえ、大丈夫ですよ」

「いや、すぐそこですよ。最後までやらしてください」

「じゃ、お言葉に甘えようかね」

「どこの家ですか」

なるべく近いことを祈った。さすがにここから二時間も歩くような距離は嫌だ。せいぜい三十分が妥当だろう。

「すぐそこなので、また、お願いします」

「はい、分かりました」

俺たちはまた実らない話を弾ませながら、その家へ向かった。思ったより進むのが遅く、自転車で四十五秒、歩きでは三分ほど行けそうな所を、わざわざ十分かけて、その家まで会話をしながら向かった。

そして家の前まで着いた。

「ありがとね。今日は楽しかったよ」

「いえ、構わないで下さい。大丈夫ですから。あ、運びますよ。玄関前まで」

俺は老人の荷物を持って、その玄関先まで運んだ。

「本当にありがとだね。おかげで助かりました」

老人は繰り返し、頭を深々と下げた。

俺は自転車にまたがり、老人に軽い会釈をしてから風のように去った。

またあの交差点に戻ってくると、寂しかった。無性に寂しかった。心に生えている枝先の葉っぱが風に根こそぎ持っていかれたようだった。

心が完全にはげている状態で、何かを求めている。また何かをしたいなどと。以前の自分にはなかった、新しい自分を見つけたのではない。以前からあったはずなのだが、俺はその自分を見ようともしていなかった。目を伏せていたのだった。

嫌なことから目を背けたり、伏せたり、たったそんなことで橋を

渡ろうとしていた以前の俺が恥ずかしくて、腹立たしかった。

信号が青になり、首をひねり、大きく一呼吸を置いてから、ペダルを踏んだ。

「あれ？」

信号を渡り終えたところ、道に何か落ちているのに気付いた。落し物だ。どうやら男の子のものらしい。明らかに子供しか持たないようなものだ。

まあ、近いので送り届けてあげよう。

俺は点滅している青信号を急いで渡った。

「ケーンくん。ケーンくん」

女は大声で、その単語を繰り返して歩いていた。

俺はすぐにピンと気付いた。それはあの男の子の母親だろうという推測だ。俺は違ってもいいと思い、その母親らしき人に言った。

「すいません。さっき、男の子を交番に連れて行っただんですが……」

「……え、そうですか。ありがとうございます」
やや無愛想な感じで、女はぶっきらぼうに言った。そして立ち去ろうとした。

「すいません。あの、多分、これ、男の子が落としたものではないかと思うのですが、一緒に持って行ってもらってもいいでしょうか」

女の手にもその落し物を渡すと、女はそれを凝視し、確かにこれはケン君のだと言った。

「ありがとうございます」

若い女はそれだけを言い残して、さっさと行ってしまった。

人は人でも、同種だが、一人一人がオリジナルだ。顔も違うし、体つきも違うし、髪の薄さも違うし、感性も違う。境遇も違うなら住んでいる環境も違う。生まれてくる時代や時間も違う。いい例として、若い女と先ほどの老人を比べると、明らかに礼儀が違う。それは一目瞭然だ。

俺はまた、青信号に変わるのを待っていた。俺はいつもより、より一層疲れを感じていた。このまま眠りたいと思っていた。

何の車も通っていない。

どうせなら渡ってしまおうとも思っていた。

「疲れたな……」

俺は少しばかり、甘えに負けていたのか、もしくは地面の坂に流されてしまったのか、自転車の車輪は公道に出ようとしていた。

すさまじい音が右耳に入ってくる。クラクションのような音だった。

その音に俺は目覚め、目の前に大型トラックが迫っているのを見た。

気付いたときは遅かった。俺は何をやっているのか。いまだに耳にはクラクションの音が響く。

しかし、クラクションの音の響きは、右から左に変わっていった。ちよつと、危ないじゃない。大丈夫だった？」

それは聞き覚えのある声だった。それもそのはず、その声の主は初めに道を教えた、あのおばさんだったのだ。俺の荷台を引っ張って、トラックに轢かれるのを助けてくれたようだった。

俺は放心状態でいた。

「大丈夫？」

「…何か、疲れちゃって」

「しつかりしなさいよ。若いんだから」

すると、その後ろから、老人も現れた。

「あらあ、まだいたの」

老人は俺に近づいて、その時の節はどうもと挨拶をした。

どうやら荷物を渡しに行っただけのことだった。特に詳しい話もせずに、すぐに戻ってきたらしい。俺との話で十分だったのか。

「あ、お兄ちゃんだ」

迷子になっていた男の子は、若い女に連れられていた。

「ありがとね。これ、お兄ちゃんが見つけてくれたんでしょ？」

男の子の手には落し物が握られていた。

不思議だった。ここに俺が助けた人たちがそろった。こんなこと

があるのか。おばさんを道案内して、迷子を交番に連れて行き、老人の荷物を持ち、落とし物を若い女に渡して迷子の場所を教えた。そして俺はおばさんにこうやって助けられた。この周期的なものは何だろうか。

「あら、さつきより、いい顔になったわね」

俺の顔から笑みがこぼれ落ちていた。

人はどうやって生きているのだろうか。

俺の心は温かくなっていた。

（後書き）

これは最近の人に対するメッセージです。

あなたはどんなことに気付けたでしょうか。

これからの参考になりたいと思いますので、良かったら感想をお願いします。よりよい作品作りにご協力ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6249c/>

クロス・ロード

2010年10月8日15時05分発行